

セッション5

召命と職業

社会の中で信仰によって生きる

フィリス・クロスビー著

召命と職業

目的

この論文は、学び手が御国の原則に従って聖書的な仕方で働くことと、自分の職業を神の召命に照らし合わせて追及していくことを助けるためのものです。

目次

はじめに

第1章 労働についての聖書的な見方

第2章 召命の基本設計

第3章 職業選択に関する考え

第4章 目的をもって造られている

はじめに

人生の意味と自分の価値を追及する人間の願いは、人生とは本来どうあるべきかという、遠い昔の思い出の中にあります。私たちは神と深い関係を持ち、神の代理人として有意義な仕事を任せられた者として造られました。しかし、しばしば私たちは、本来の姿とは異なる単調さの中に落胆し、労働というものを、自分に与えられている具体的で特有の目的とは全く異なるものと見なしてしまいます。

神は私たちを召し、私たちをご自身とご自身の目的に再び結び合わせてくださいます。神が召してくださるので、私たちの労働は有意義なものに感じられます。オース・ギネスは著書「The Call(召命)」で、神に応答する人の人生における神の召命の偉大さについてこう述べています。「神は私たちをご自身のもとへはっきりと召されるので、私たちは神の招きに応じて仕えるために、私たちのあり方、私たちのすること、私たちの持っているもののすべてを、特別な献身と力強さとともにささげるのである。」

1

労働の深い意味を求めているにせよ、どのような仕事をすべきか決めようとしているにせよ、しばしば私たちは、召命という主題と向き合う必要があります。この論文は、職場において自分の人生を投資しようとしている人たちのために「召命」と「職業」という主題を結びつけることを試みたものです。

第1章 労働についての聖書的な見方

神の召命と職業とを的確に結びつけるには、聖書的な視点から労働の目的と意味を理解する必要があります。

この世は「shalom(シャローム)」のために造られました。「シャローム」とは普遍的に繁栄していることであり、人類は本来そのような状況のもとで生き、仕事するように意図されていました。「シャローム」というヘブル語はしばしば「平和」と訳されますが、実際はもっと多くのことを意味する言葉です。それは、神、人間、被造物がともに織り合わされ、それぞれが互いに正しい関係を持っているという「相互」依存のことです。この相互依存、言い換えるなら正しい関係のゆえに、すべてが栄え、普遍的な正義、繁栄、喜びが存在します。

「従え、支配せよ」という人間に与えられた最初の職務規程は、創世記 1:28 で与えられています。ウィクリフ聖書注解(Wycliffe Bible Commentary)が述べているように、私たちは「この地上における責任ある神の代理人かつ管理者であり、創造主のみこころを行い、神の目的を成し遂げるべき者たち」です。² 人類はエデンの園から出て行き、この地上のあらゆるところを人類の繁栄、つまり「シャローム」にふさわしいものにするように意図されていました。これこそ、神のかたちに造られたことがもたらす、信じられないような結果だったのです。

労働は墮落が起こる前に与えられたものであり、被造物の一部であるということを心に留めることは大切です。ですから、労働は「非常に良い」ものなのです。神が、従え、支配せよという命令を下された 3 節後の創世記 1:31 にこう書かれています。「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。」

創世記 2:15 には、園を耕すことがすべての労働の実例として用いられ、労働を「シャロームを築く活動」として示されています。「神である主は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。」耕すこと、またそれ以外のすべての労働は、人類の利益と繁栄のために、原材料を再編成するプロセスです。私たちの労働は、本来、人々が

栄えるために必要なものを提供することです。人類の繁栄、言い換えるならシャロームは、労働という制度を通してもたらされるように意図されていたのです。

罪はシャロームを破壊し、シャロームを造るように意図された労働というものを歪めてしまいました。その結果、すべての労働が楽しいもの、充足感を与えるものとは言えなくなりました。創世記 3:17 には、罪のために本来の労働を示す実例であった耕すという行為が変化してしまったことが記されています。「...土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。あなたは、顔に汗を流して糧を得、...」

罪は労働を歪めるだけでなく、私たちの労働の環境をも破壊します。その結果、労働という名において、人類の繁栄の促進や回復をもたらさない活動が盛んになされています。しかし、シャロームを築くという私たちの基本的な職務規定は無効になったわけではありません。人類は今なお、この世を人類の繁栄にふさわしいものにするように意図されています。しかし、今の世にはシャロームを破壊する要素があるので、私たちはシャロームを造り出すだけでなく、回復する必要もあります。これは教会や超教派団体における仕事だけでなく、あらゆる職業において当てはまることです。

第1章 労働についての聖書的な見方:

まとめ

- この世はシャロームのために造られた。
- 従え、支配せよという人間に与えられた最初の職務規定は、シャロームを造ることである。
- 罪のゆえにこの世にはシャロームを破壊する要素があるので、私たちはシャロームを造り出すだけでなく、回復する必要もある。

第2章 召命の性質

召命は指示されたものです。イエス様は「来て、わたしに従いなさい」と言われました。応答するために、目的地を知らなければならないということはありません。神がイニシアチブを取られ、私たちは従います。神が私たちを召されるとき、まず他の何よりもご自身のもとへ召されます。しかし、私たちが応答するにしたがい、神は贖いの目的を成し遂げるように私たちをさらに招いてくださいます。私たちはそのようにして、「わたしに従い続けなさい」という神の御声を聞きながら、召命と応答というパターンを生活の中で築いていきます。

召命と応答というリズムの結果、伝統的に「一義的な召命」と「二義的な召命」とが区別されてきました。まず神は私たちをご自身のもとへ召され、それから私たちに仕事を与えられる、という考え方です。このような区別は助けになりますが、もし召命をこのように単純化させてしまうなら、「召命」と「目的」とを混同し、一つの形のない存在にしてしまいかねません。

「召命」と「目的」は統合されていますが、同じものではありません。全人類を網羅する神の包括的な目的は、一人一人に対する具体的で、個人的な目的とは異なります。召命が具体的で個人的なものとなっていくに当たり、「召命」と

「目的」を区別することは大切です。それは、私たちの神への応答は、「天職」(私たちのすること)と、「人生の到達点」(神が一人一人に備えておられる目的)という、二つの部分において理解される必要があるからです。

ここで「召命」と「目的」を定義することが助けになるかもしれません。召命とは、神が私たちをご自身のもとに招くことです。私たちは一義的には、何かの任務に対してではなく、神に対して召されています。それは神のかたちに造られた者に対する神のイニシアチブによるものです。しかし、何のために私たちを召すのでしょうか。私たちはみな、神のかたちに造られた者として、一つの包括的な目的を共有しています。ウエストミンスター信仰告白は、私たちの究極的な目的は「神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶこと」であると説明しています。ですから、私たちの一義的な召命は、神に栄光をあらわし、神を喜ぶという究極的な目的のための、神に対する召命なのです。

究極的な目的と一義的な召命とともに、私たちはそれぞれ個人的な召命に反映される特定の目的を持っています。神の召命に応答することによって、私たちは神と調和した生き方をすることができるようになり、私たちが意図されている本来の姿になることができます。また、神の目的を成し遂げるために神と協力することも可能になります。

オース・ギネスはこう述べています。「それゆえ召命は、私たちに単なる義務感ではなく、強い願望を抱かせる。それは召命が私たちに、人間として到達すべき水準にまで成長するようにと、絶えず直接的に挑戦してくるからである。」³

目的も召命も、ただ神にのみ根ざし、成し遂げられるものです。私たちは、一義的なもの、究極的なものが何であるかを理解することによって、単に自分の欲望を満足させたり、自己実現を求めたりすることから守られます。神の栄光のために生きることが私たちの究極的な目的であるなら、二義的なことをより賢く選択することができます。私たちは金銭、安全、賞賛を求める欲望ではなく、絶えず神の栄光のために働くようになるのです。

言葉の定義: 応答の構成要素

一義的な召命: 神に対して、神のために、神によって

オース・ギネスはこう述べています。「キリストに従う者としての私たちの召命は、神によって、神に対する、神のためのものである。私たちは、何か(子育てや政治)でも、どこか(大都市の繁華街や中国)でもなく、何よりもまず、ある方(つまり神)のもとに召されているのである。」⁴ 彼はさらにこう続けます。「召命に応答するための鍵は、だれに対してでも、何に対してでもなく、神ご自身を第一とし、献身することである。」⁵

どのようにして理解、あるいは識別するか: 私たちの究極的な目的は聖書に啓示されていて、それは、いのちある全てのものに当てはまります。

究極的な目的: 神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶこと

人生における私たちの究極的な目的を把握することは、私たちの人格を高め、また守ってくれます。究極的な目的は神の栄光をあらわすことであると知るなら、神の栄光を無視して自分の存在意義を追い求め、神の召命に対して自堕落になるようなことから守られます。神を喜ぶべきであると知るなら、すべてのことを犠牲にしても自分の欲望を満たそうとすることから守られます。

どのようにして理解、あるいは識別するか: 聖書に啓示されています。また、いのちある全てのものに当てはまります。

人間に与えられた最初の職務規定: この世を人類の繁栄にふさわしいものにする

あらゆる労働は、シャロームを造り出したり、あるいは回復させたりするものとして意図されています。

どのようにして理解、あるいは識別するか: 聖書に啓示されています。また、いのちある全てのものに当てはまります。創世記 1:28、2:15 参照。

二義的な召命: 「天職」と「人生の到達点」

私たちの二義的な召命は、一義的な召命と究極的な目的を実践したものです。神の召命に対する応答として、私たちはまず完全に神に献身し、そしてその結果、次の問いに答えようとしています。「私が住んでいるこの世において、私は何をすべきだろうか。」この問いに対する答えは、絶えず何らかの仕方で人類の繁栄をもたらします。それには「天職」と「人生の到達点」という二つの部分があると考えると最も理解しやすくなります(変わった言い方ですが、神の具体的な目的と考えてください)。「天職」とは「私は何をすべきか」という問いに対する答えであり、「人生の到達点」とは「私は何を成し遂げるべきか」という問いに対する答えです。二義的な召命が「天職」と「人生の到達点」からなっているなら、それは私たちの職業を超越したものとなります。たとえ職業が変わっても、人生におけるより偉大な目的は変わることがないのです。

天職: 私たちの労働、職業、趣味(神に従う領域におけるもの)

天職とは、職業の領域のことです。私たちのする労働のことです。労働とは、神のかたちに造られた結果として与えられているものであり、自分自身も満足し、人類の繁栄も促進するものとして意図されたものです。ですから、どの天職も大切であり、等しく価値あるものです。労働は被造物の一部なので、それを聖なるものと俗なるものとに区別することはできません。もちろん私たちは堕落した世に生き、すべての職業が人類の繁栄を促進しているわけではありません。だからと言って、そのような職業は大切ではないのではなく、改革される必要があるのです。

どのようにして理解、あるいは識別するか: 職業は人間が選択するものであり、おもにその人の能力や興味を通して識別されます。しかし、私たちの最終的な目標は個人的な満足ではないので(目標はシャローム)、神の導きによって信仰によって進むときに、ある程度、神の奥義も関係します。

人生の到達点: それは、私たちの人生に対する神の具体的な目的です。人類のうち神が住まわれる(私たちのうちに神の支配が全うされる)という究極的な目標、より偉大な幸福のために、神が私たちの人生をどのように用いるかということです。私たちは人生

の到達点を追及したり、管理したり、支配したりすることはできません。忠実に生きるにしたがって、神は私たちの知るべきことを示してください。私たちは人生における神の目的の一部を識別するかもしれませんが、そのような目的は私たちの職業を超越したものです。

どのようにして理解、あるいは識別するか:もし識別できるとしたら、神の奥義によって示されます。しばしば後で振り返って識別することができます。また、いつもすべてが示されるのでもありません。

私たち一人一人に対する神の具体的な目的は、識別できたり、できなかったりするということを心に留めておくことは大切です。私たちはあることについては、完全に知ることはないかもしれないのです。具体的な目的のためにある職業を選ぶかもしれませんが、神は私たちの理解を越えて、さらに他のことも成し遂げられるかもしれません。人生の到達点の多くは私たちのコントロールの及ばないものであり、それゆえ、私たちは自分の存在意義を追い求めて、自己正当化することから守られるのです。

第2章 召命の性質:

まとめ:

- 私たちの一義的な召命は、神の栄光をあらわし、神を喜ぶという究極的な目的のための、神に対するものである。
- 二義的な召命は、「天職」と「人生の到達点」から成り立っている。
- あらゆる労働は、シャロームを造り出し、あるいは回復させるために意図されている。
- 労働は被造物の一部なので、聖なるものと俗なるものとに区別することはできない。

第3章 職業選択に関する考え

労働の目的と召命の性質を理解したなら、職業について考える準備が整ったことになります。召命が「来て、わたしに従いなさい」と指示されたものであるように、職業も神から指示されるものです。職業を一つのものとしてではなく、方向性や進路と考えてみましょう。

職業における進路は、私たちの人生の筋書きの一部です。特定の時期にする特定の仕事ではなく、経験や知識、教育、そして雇用の蓄積が私たちの天職、あるいは召命の方向性を形作ります。ある意味で私たちは、職業にかかわらずではなく、職業を通して、神が与えてくださる任務や目的を成し遂げるべきです。私たちの職業は、この世において神のシャロームを成し遂げるための方法となるのです。

職業についてのもう一つの考え方は、それは召命を成し遂げることを追い求めるために管理すべき資源である、というものです。職業は価値を高めていくことのできる資源です。私たちは経験や教育を得るにつれて、職業を通して影響力を得ていきます。職業を通じて様々なことを成し遂げていくことによって、社会資本を得ることもできるかもしれません。職業を通して社会資本を成長させるにつれて、この世における神の目的を果たすために、その能力をますます高めていくことができます。

私たちの二義的な召命は、人生において自分自身をどのように投資していくかを決めます。それは「私は何をすべきか」という問いに答えるものです。神が私たちに召しておられることを、市民グループ、趣味、家庭、また生活におけるその他の要素を通して成し遂げることはできますが、職業は私たちの召命のその側面に最もよく取り組むことのできる領域です。私たちの召命は職業を含みますが、それは単に職業にとどまるものではなく、超越したものです。

商業、芸術、メディア、学術、広告、建築、デザイン、交通手段、技術、政府、法律といった領域について考えてみましょう。これらのすべての領域は被造物の一部であり、人類の繁栄を造り出し、促進することを意図したものです。それぞれの領域は創造のみわざに深く根ざしており、「創造」、「墮落」、「贖い」、「回復」という福音の四つの部分（「原状」、「現状」、「可能性」、「将来」という枠組み）の文脈において最もよく理解することができるものです。

例えば、法律について考えてみましょう。「法制度はどのように正義、罰、あわれみといったことを反映しているだろうか。どのように反映するべきだろうか。法制度がシャロームを促進するために、どのような変化が必要だろうか」といった中心的な質問に答えることによって、法律家という職業がどのように大切なものであるか福音を通して理解することができます。また、芸術を第二の例として考えてみましょう。「福音は芸術について何を語っているだろうか。芸術は創造性や美しさをどのように反映しているだろうか。どのように反映するべきだろうか。どのようにすれば反映し始めるだろうか。芸術はどのようにシャロームを促進しているだろうか。どのように破壊しているだろうか。」どの職業も、福音のレンズを通して最もよく理解することができるのです。

私たちは信仰と労働を結び合わせることによって福音との関連性を明確にすることができ、ともに働いている人々に、この実際の世界において福音がどのように関わるか理解することを助けることができます。情報を伝達することだけでは、それがどれほど完全なものであったとしても、人々がこのようにはっきりと、また実践的に神を理解するのを助けることはできません。

職業の選び方

今日の社会では、労働は成功や賞賛の方法となり得ます。しばしば労働は、金銭を、あるいは私たちが金銭で買うことのできるようなライフスタイルを得るための手段となっています。しかし労働はシャロームを築く活動であると意図されているのなら、私たちは自分の成功や満足だけでなく、もっと多くのことを考える必要があります。

職業を選ぶとき、二つの視点から考える必要があります。私たちは可能ならば、自分に「ふさわしく」、人々に広く「益をもたらす」仕事を選びたいと願います。自分が意図されたことをしながら、公共の利益のために貢献したいのです。

－ 自分に「ふさわしい」仕事

私たちは一義的な召命を反映し、神の目的を成し遂げるために前進することのできる仕事をするとき、最も充足感を得ることができます。神が私たちにある目的のために召されるので、その目的のために神が私たちに造られ、賜物を与えてくださると期待することは理にかなっています。神は私たちが行うべき仕事にふさわしい能力と興味を与えておられます。私たちは楽しむことができ、上手にすることのできる仕事をするとき、最も満足するのです。

職業の選択についてオース・ギネスの以下の考えについて考慮してみましょう。「給料、名声、親からのプレッシャーといった外側の理由から職業を選び、それが賜物や召命といった内側の理由につり合わないものであるなら、私たちは後で不満を抱くようになる。『成功』は私たちが外側から褒めそやすが、私たちの内側では『存在意義』を見出すことができなくなってしまう。」⁶

- 人々に広く「益をもたらす」仕事

聖書を通じて、公共の利益のために働く準備をし、積極的にそうしている神を信じる者には、敬虔さと善行とが結び合わさっていることが示されています。自分の賜物と召命にしたがって職業を選ぶことは大切ですが、究極的な目標は自分を満足させることではありません。

最も大切なのはシャロームです。職業を選ぶとき、その仕事が人間の共同体を建て上げるものか、損なうものか考えましょう。その仕事は人々が繁栄することを助けるでしょうか、それを妨げるでしょうか。たとえその仕事が職業的に、あるいは個人的に充足感をもたらすものでなくても、シャロームを、職業を選択するときの絶対的な基準としましょう。

第3章 職業選択に関する考え:

まとめ:

- 職業は神から指示されたものであり、また資源でもある。
- 可能ならば、自分にふさわしい職業を選択する。
- 人々に広く益をもたらす職業を選択する。

第4章 目的をもって造られている

人間の目は驚くべきものです。それは無数の視的な情報を脳に伝えるためにデザインされた、非常に複雑な器官です。私たちの周囲の世界をはっきりと見、識別することができるように、人間の目は、瞬間ごとに、複数の調整を同時に行います。目は状況の明るさや暗さに応じて調整します。様々な光において、良い解像度と鮮明度をもって瞬間的に焦点を合わせ、ほとんど無数の色彩や色相を識別することができます。

網膜は驚くべきものです。光を化学的なエネルギーに、そして電子エネルギーに変換する光受容体からなる、六層にわたる光に敏感な細胞から成り立っています。一つの目にはそのような光受容体が1億3700万あります。大多数のデジタルカメラは100万しかありません。それらの細胞の層は、最終的な処理をするために脳にデータを送る前に、六つのレベルの情報を処理します。目はそのようなデータをZipファイルで送るかのように圧縮してから脳に送ってさえます。その情報は脳の様々な部分に送られます。そして、決して不協和が起こらないように、それぞれの目からなる二つのフィールドは境目なく再結合しています。

目が驚くべき器官であることを、だれが否定することができるでしょうか。しかし、だれかが目で聞こうとしている姿を想像してください。光学的に設計されているものは、聞くことには役に立ちません。色彩を聞くことはできず、光や暗闇は音量や音の高さに対応しません。目は非常に複雑に造られています、聞くことはできないのです。

人間の目と同じように、私たちも目的をもって造られています。私たちはそれぞれ特定で、特有の目的をもって造られているので、一人一人が独特な存在です。それは私たちがどのように生き、どのように神の召命を聞くかに大きな影響を与えます。神は私たちの召命にふさわしく私たちをデザインされたからです。私たちがどのように造られているかは神の目的を知るための手がかりとなります。それはまさに、光受容体が目を見るためであり、聞くためではないことを示しているのと同じです。

1 コリント 12:4-7、14-21

さて、賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。しかし、みな益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。

確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。たとい、足が、「私は手ではないから、からだに属さない」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。たとい、耳が、「私は目ではないから、からだに属さない」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょうか。もし、からだ全体が聞くところであったら、どこでかぐのでしょうか。しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。もし、全部がただ一つの器官であったら、からだはいったいどこにあるのでしょうか。しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うこともできません。

私たちは何のために造られているか、どのようにして知ることができるでしょうか。この箇所は私たちに、一つの大切なヒントを与えてくれます。私たちは「才能」と「興味」について考える必要があります。そのような特徴は、デザインされた私たちの内側の姿の一部であり、それによって二義的な召命を見極め始めることを助けてくれます。しかし神のデザインだけが神の召命を見極める唯一の要因ではありません。「資源」と「機会」という外側の二つの要因も考える必要があります。「才能」、「興味」、「資源」、「機会」という四つのことをともに考慮し、多くの祈りとふさわしい助言を得るなら、自分がどのような者であり、自分の人生に対する神の召命が何であるかをよりよく理解することができます。

神の召命を見極め、応答する

私たちは二義的な召命を見極める前に、一義的な召命に忠実に応答する必要があります。それは神が私たち^に代わってできることではありません。神が私たちを召されたのですから、私たちは応答する必要があるのです。ダラス・ウィラードは霊的な生活について以下のように述べています。「人が神のイニシアチブを通して神と神の御国に対して生

きた者とされたとき、その人のすべてが御国の秩序とどれほど一致したものとなるかは、その人のイニシアチブにかかっている。」⁷

私たちは御国の秩序と一致するために、神の召命に応答する必要があります。ウィラードはさらに続けてこう述べています。「私たちのうちには、私たちが意識して命じることのできるものよりもさらに多くのものがあることを知る。そして、自分自身の『すべて』を見極め、それを神のみことと神の品性とに調和させることがどれほど難しいかを見出すのである。しかし、ますます多くの恵みをいただきながらそこに向かって進むとき、私たちは経験上、自分のすべてを神と調和させることは、神が私たちの『ために』してくださるものではないことに気づく。「私たち」こそ、行動しなければならないのだ。」⁸

この「行動」とは、祈り、礼拝、神の御声を聞くことから始まります。そのような行動は生涯を通じて持続すべきことであり、実践と鍛錬が求められます。そのために必要な努力や技能は献身した瞬間にすべて与えられるのではなく、時間をかけて鍛錬することによって得るものです。

プロセスを理解する: 召命について考えるにあたり、神の召命の本質を明確にすることが大切です。それはどのように発せられ、そして私たちはどのようにしてそれを聞くのでしょうか。いくつかのよく用いられている方法を見ていきましょう。

ミッションステートメント(使命記述書)を書く方法: ミッションステートメントを書き、それを召命と誤解することはよくあることです。ミッションステートメントを書く目的は、意志決定をするための簡潔で、やる気を抱かせる宣言文を書くことです。ミッションステートメントはとても役に立ちますが、召命と同じではありません。より正確に言うなら、ミッションステートメントとは、自分が何をすべきか感じたことをまとめたものであり、それは神の召命を聞いた結果できたものであるかもしれませんが、そうでないかもしれません。召命は神から指示されたものであることを思い起こしてください。それに対してミッションステートメントは、目標を表す場合が多いのです。

論理的な方法: この方法は長所と短所、興味や機会などを評価し、どのような行動を起こすべきかを決めていくものです。この方法は行けるところまでは行けますが、理性だけで神を知ることはできないので、論理的な評価だけでとどまることはできません。神は理にかなった方であり、また奥義に満ちた方なのです。

神秘的に奥義を求める方法: 神の御声を聞く別の方法は、どのような方法であれ理性を使って神の召命を知ることは何らかの仕方で神を侵すものであるかのように、神秘的な仕方「のみ」によって知ろうとする方法です。しかし神は私たちに思考力を与えておられます。神と隣人を愛するという大命令を成し遂げるためには、私たちは思いを尽くして愛する必要があります。

複合させた方法: 召命は神から指示されたものであるということは、神の召命を見極めることは、地図に従っていくというよりも、宝探しをすることに似ています。時には、ある具体的な行動を通して、ある出来事において、二義的な召命の一部を成し遂げることもあるでしょう。しかし私たちの召命は、しばしば、いくつもの出来事を通して、あるいは似たようなテーマについて長期間、または生涯にわたって関わるプロセスを通して示されていきます。ですから、神の召命を聞

くために、理性と奥義の両方が関わります。私たちは理性を用いますが、神が個人的に語ってくださるまで待ち望みません。神はしばしば私たちの理性を通して語りかけますが、いつもそうであるとは限りません。時間をかけて追求し、聖霊の働きによって、神が与えてくださる二義的な召命がより明確になっていきます。

二義的な召命と特定の状況における神の導きとを区別することは大切です。しばしば私たちは、召命を具体的に成し遂げるためにどうすべきか導きを求めますが、召命は導きを越えたものです。神はたいてい、私たちが召命を成し遂げるのに最もふさわしいことをするように導かれます。しかし、私たちは神がなされている全体像を知ることはできないので、注意する必要があります。私たちは召命に照らし合わせながら意思決定をしますが、たとえ召命に反するように思っても、私たちは絶えず神の導きに従順に応答する必要があります。

神の召命を見極めるために神に拠り頼み、その召命を受け取る準備をし、応答する決意を持つことが必要です。ギネスはキリストに従う者の心構えについてこう述べています。「それは最高の状態で応答できるように研ぎ澄まされた従順である。私たちは、神のかすかな言葉やしるしに対して応答できるようにしておくべきである。神はご自身に従う者たちが従うことを期待しておられる。」⁹

神の召命を聞くとき、すぐに答えが与えられると期待することはできません。神がそうされる時もありますが、時間をかけて示されることもあります。神が何に召しておられるかを十分に知るのに、何年もかかることさえあります。召命とは人生を通じて取り組むことであり、特定のことにについて意思決定をするものではありません。召命とは私たちのすべてを神にささげることを通して、人生の方向性を定めるものです。

今日、ミッションステートメントやビジョンステートメントを一つか二つの文にまとめることがよく行われています。しかし召命は、それほど簡単に扱えるものではありません。神が私たちを何に召しておられるかを探求するにつれ、しばしばぼんやりしていたものが、時間をかけてより明確になることもあります。いつもそうなるとは限りません。神の召命は意識的に求め、静かに御声を聞くことによって示されます。しかしそうであっても、私たちの人生は動的であり、召命に対する私たちの見方も変わることがあります。

自分自身を知る: 先に、神は私たちをある目的のために召されているので、神がその目的のために私たちを造られ、賜物を与えられ、整えておられると考えることは理にかなっている、ということ学びました。つまり、私たちがどのように造られ、どのような賜物が与えられているかを見ることによって、神の目的を見極め始めることができるかもしれません。

「The Call」(オース・ギネス著)は、賜物と召命との関係について次のような洞察を示しています。「賜物は召命を見極めるのを助けてくれる唯一のものではない。それは、家系、人生における機会、神の導き、神が示されたことに疑いなく従う私たちの心構え、といった他の要因とともに、神の召命にしたがって与えられているのである。しかし、召命を見極めるための中心的な方法として賜物を見ることを強調することは、大多数の人々の考えと正反対のことである。」ギネスは私たちに次のことを思い起こさせています。「私たちは賜物を所有しているのではない。私たちは賜物の管理者なのである。」¹⁰ このことは、私たちが賜物を用いるにあたって自己中心的になったり、自分の欲望を満たそうとしたりすることを防いでくれます。

人生のテーマとして考えられるもの、また召命として与えられているかもしれない領域を見極めるために、私たちは内側のデザインと、特に能力、興味、資源、機会といった外側の状況とを見ていきます。

それをするには、読み、考え、思い巡らすための十分な時間を取る必要があります。まず、「職業に関する調査」を手にとってください。十分な時間を取り、自分の考えをまとめてください。この演習の目的は、神があなたを何に召しておられるかを確実に知ることはありません。しかしこれを通して、あなたが召命という視点から、自分がどのような者として造られ、どのような状況に置かれているかをよく理解し、取り組み始めることができるようにと願っています。この演習は、あなたが人生をどのように歩むようにと神が召しておられるか、あなたが暫定的に知ることができるように役立つことでしょう。

第4章 目的をもって造られている:

まとめ:

- 二義的な召命を見極める前に、一義的な召命に忠実に応答する必要がある。
- 召命を発見することは、地図に従っていくというよりも、宝探しをするのに似ている。
- 人生のテーマとして考えられるもの、また召命として与えられているかもしれない領域を見極めるために、能力、興味、資源、機会といった外側の状況とを考える必要がある。

召命と職業

- 1 *The Call*, 第4章 p 29
- 2 *The Wycliffe Bible Commentary*, Electronic Database. Copyright © 1962 by Moody Press
- 3 *The Call*, 第10章 p 85
- 4 *The Call*, 第4章 p 30
- 5 *The Spirit of Disciplines*
- 6 *The Call*, 第17章 p 151
- 7 *The Spirit of Disciplines*, 第5章 p 68
- 8 *The Spirit of Disciplines*, 第5章 p 68
- 9 *The Call*, 第25章 p 235
- 10 *The Call*, 第6章 p 46